

Key
Person



合同会社 家族舎 代表

ちよう めい みん

趙 没名

『家族舎』の利用者の多くは人工呼吸器などを装着し、常に介助を必要とする人々だ。
そして同社を創業した趙代表の二人のご子息もまた、重度の障がいを持つ当事者である。
当時はまだ自治体などによる支援体制が整っていない中で、
難病を抱えて生まれてきたご子息たちの介護に奔走した代表。
その経験から、重度障がい者とその家族の生活を支援する事業を立ち上げようと決心した。
「私たちが行っている仕事は、確かな技術と志がなければできません。
プロとしての責任感と誇りを持ち、利用者さんの人生と向き合っていきたいです」。
一人の母の覚悟から生まれた事業は今、多くの人を巻き込んで社会を動かそうとしている。

「自分の経験を活かし、人の支えになること。
それが、私の人生のテーマです」



重度訪問介護サービスや、障がいのある訪日外国人への通訳支援などを手掛ける『家族舎』。支援現場で得た知見を活かして福祉従事者向けの研修会を実施するなど、社会啓発活動にも尽力している。本日はタレントの島崎俊郎氏が、同社を訪問。同社の創業者であり、確かな信念を胸に利用者と向き合う趙代表の原点を追った。

留学先の日本で授かった子どもが 遺伝性の難病であると判明

——はじめに、趙代表の歩みから伺います。ご出身はどちらでしょうか。

中国の上海で生まれ育ち、大学では日本語を専攻しました。日本の漢字は中国語と発音が違いますし、ひらがなやカタカナもあるので、最初は「なんてめんどくさい!」と思いました（笑）。ただ、難しいからこそ面白さもあり、どんどん日本語に引き込まれていきましたね。卒業後は中国のテレビ局に就職し、国際部で海外の取材をしたり、通訳や翻訳などに携わったりしました。そうして海外のテレビ局のクルーたちと交流する中で刺激を受け、次第に中国での仕事に窮屈さを感じるようになったのです。

——窮屈さ、ですか。

当時は今と比べて個人の自由が認められておらず、様々な制約がありました。些細なところで言えば、局内にある使用

済みのポスター1枚でも、「中国のものだから」と他国のクルーに譲ることは認められません。私はより広い世界を見たいと思い、日本への留学を認めていただきました。それが24歳のことです。

——日本ではどちらで勉強を？

大阪の大学です。初日の夜、下宿先の家でご馳走になった親子丼の味は今でも忘れません。その美味しさに感動し、いつか両親にも食べさせてあげたいと思いました。やがて留学期間を終えて一度復職したのですが、同期の協力を得て再び留学させてもらうことに。神戸の大学院で学び、博士課程で出会ったアメリカ人の夫と京都で結婚しました。

——博士課程にまで進まれたのですか。向学心が強いんですね。

次のステップへ踏み出す上で、多くの知識を身につけておくことは強みになると考え、勉学に励んできました。その後、2人の息子に恵まれたのですが、2人とも筋ジストロフィーという難病で、重度

の障がいを持っていたんです。実は遺伝性の病気で男性の場合に発症し、私の兄二人も同じ病気で生後間もなく亡くなっているそうなんです。私は長男の出産後に母からそのことを聞き、大きなショックを受けました。

——それは、不安でたまらなかったでしょうね……。

ええ、とてもつらかったです。ただ、次男を授かった際、医師からは「生む前に性別を調べよう」と提案されましたが断りました。親が命の選別をすることはできません。クリスチানের夫も「諦めてはいけない。祈ろう」と励ましてくれました。そうして息子たちを育てた経験が、後に現在の事業につながりました。

重度障がい者介護の経験者として 技術と志を持った人材の育成に尽力

——現在、『家族舎』さんでは重度訪問介護サービスを手掛けておられますが、代表がご子息を育てる上で必要性を感じたから起業されたということですか。

そうです。2人の子どもたちを介護するのは想像以上に過酷でしたし、当時は今のように重度の障がい者を支援する体制が整っていませんでした。肉体的にも



特別
対談

島崎
俊郎

ゲストインタビュー

趙
没名

代表
ちょう
めい
みん

当事者だからこそ利用者に寄り添える

趙代表がお二人のご子息を育てると決意した当時、日本では重度障がい者に対する支援サービスは今ほど浸透していなかった。昼間は仕事に行き、帰宅後は子どもたちの介護に追われる日々。愛する子どもたちのためにという一心で頑張ってきたが、一日中気の休まる暇がなく、このままでは共倒れしてしまうというほど心身共に消耗していたという。そんな経験があるからこそ、自身で重度訪問介護サービス事業を立ち上げた今、利用者の家族の苦勞がよく分かる。誰にも頼ることができず悩みを抱

え込む家族も多い中、代表の存在は大きな支えとなるに違いない。

また、『家族舎』では代表のご子息も共に働いている。重度の障がいを持つ当事者だからこそ、利用者目線で判断することができ、行き届いたサービスを提供できるのだ。代表は、細やかなところまで気を配る繊細な日本の介護技術を大切にしていきたいという。身体だけでなく、心にまで寄り添うサービス。それが、『家族舎』の目指す介護の在り方だ。

精神的にも限界を感じ、一人では無理だと痛感したんです。「誰か重度障がい者向けのサービスを提供してほしい」と願う中で、ふと「そうだ、自分でやればいいんだ」という考えが浮かびました。私はこれまでの経験により、理想とする介護への確固たるビジョンを持っています。であれば、他人の助けを待つよりも、自分で会社を立ち上げた方が良いと思ったのです。そうして2015年、『家族舎』を設立しました。

——どのような理念を持って立ち上げられたのでしょうか。

ヘルパーは単なるお手伝いではなく、教師や医師と同じように技術と志がなければ務まりません。ですから私は、確かな技術、そして「利用者さんのより良い人生のために」という高い志を持って働けるスタッフの育成に注力しました。創業当初のメンバーは今もほとんど残ってくれていますし、私もさらに研鑽を重ねていくつかの介護現場の資格も取得しま

した。

——代表は本当にバイタリティーのある方で、尊敬しますよ。

子どもたちに強くしてもらったのだと思います（笑）。最初のころは、無理だと言って毎日泣いていました。お陰様で長男は大学を卒業し、現在は当社の役員として働いています。次男も社会福祉士の国家資格を持ち他の法人でソーシャルワーカーとして働いており、介助は必要ですが2人とも経済的に自立しているんですよ。

——それは嬉しいですね。スタッフさんは何名ほどいらっしゃるのでしょうか。

常時20名ほどいて、みんな介護の畑で日々精進しております。これまで私は社会に育ててもらいましたから、今度は私が社会に恩返しする番だと思っています。障がいのある人の支えになること、それが私に課せられた使命だと感じています。

——最後に、今後の展望を伺います。

会社を大きくしたいという希望はない

のです。長男が生まれる前は我が子の将来に期待を膨らませましたが、障がいがあった後は生きていてくれるだけで幸せだと実感しました。出産当時、医師からは「3カ月の命」と言われ、3カ月を過ぎると「5歳まで」、その次は「10歳まで」……。命の灯火を明日へとつなぐために、今日1日乗り越えるので精一杯でした。会社も同じことです。1日1日を大切にするという思いを忘れずに、これからも続けていきたいですね。

（取材／2019年7月）

After the Interview

「とても強い信念を持って事業を推し進めておられる趙代表。その背景には、愛するお二人のご子息の存在があったのですね。ご子息たちをはじめ、周囲の方々に成長させてもらったからこそ今があるという言葉が印象に残りました。その真摯な姿勢は、きっと多くの人の心を動かしておられることでしょう。日本の福祉に、温かい光を差し込む存在だと思います!」

島崎 俊郎・談